



曉 鐘 の 音

NO. 33

(か ね の ね)

秋田大学教職大学院 2025.3.6

教職大学院 10 年目に向けて

教職実践専攻 (教職大学院)

教職大学院 学校マネジメントコース長 佐藤 修司

秋田大学教職大学院は 2016 年に創設され、2015 年度の新入生は 10 期目となります。修了生は昨年度までで 138 名となり、今年度で 25 名が加わって 163 名となる予定です。秋田を中心にして、京都や岐阜、神奈川、千葉、東京、埼玉、福島、宮城、山形、青森、ベトナムでも修了生は活躍しています。修了生は秋田の教育界の屋台骨を支え、県外においても、秋田の教育実践知を糧にして各地の教育界をリードする存在となっていくことを期待しています。

10 年を経て、本教職大学院は安定期に入っているとも言えますが、安住、安泰は停滞ないし衰退の兆しでもあります。Society5.0、気候変動、人口減少はもちろんのこと、時代は大きく動き、学校も子どもも、親も、社会も常に変化していきます。教職大学院も常に前進し、挑戦し続けなければなりません。私たちは、どのような状況にも対応しうる、持続可能な新しい教育システムの創発に取り組むという希望と大志を持ちたいところです。

2025 年度に目指すこととしては、第 1 に ICT を十分に活用した教育・授業プログラム、及びそれを可能にするための研修・養成プログラムの開発と普及が挙げられます。情報データ科学部の誕生 (秋田大学の 5 番目の学部) でも分かるように、2022 年度～2027 年度の第 4 期中期計画期間の 6 年間は大学全体で Society5.0 への対応を重点課題としています。本大学院の授業や研究、行事等でも追求していきます。

第 2 は修了生の縦、横のネットワークを、県外、県内、地域別、校種別に確立していくことです。学校現場で抱える様々な課題、悩みを共有し、支え合える状況を作っていきたいと思っています。2023 年度、24 年度は附属学校園と県教委事務局のレベルで懇談会を実施しました。これを拡大したいところです。

第 3 は、今年 12 月に、日本教職大学院協会の研究大会が秋田大学を会場にして開催されることです。教職大学院に関わる全国的な状況、各地の先進的な取組に触れるとともに、秋田の取組を発信する貴重な機会です。2022 年に秋田で開催した日本教師教育学会研究大会 (全面オンライン) 以来で、しかも対面とオンラインを併用するハイブリッドでの開催となります。院生のみなさんはもとより、修了生の皆さんにも多くのご協力をお願いすることになると思います。ぜひともよろしく願いいたします。



「クマよけの鈴 あります」

教職実践専攻（教職大学院）

准教授 細川 和仁

「研究者にとって2月とは」というお題をいただいて、はて、何かあるだろうか。研究者ならではのこと、2月ならではのことがパツと思いつきません。私の生誕月ではあるのですが、研究者として特に思い当たることはないので、20年前の個人的な思い出から書きたいと思います。

私は 2005 年から秋田大学に勤めているのですが、着任日はその年の2月16日です。教育推進総合センター（現・高等教育グローバルセンター）の初めての専任教員になるというポストでした。大阪大学で助手をしていた自分は、4月着任だろうと思っていたのですが、採用が決まったあと、2004年度中に来てくれ、いや少しでも早く来てくれ、となり、2月16日というめっちゃ中途半端な日に異動することとなりました。

般1（一般教育1号館）の小さめの教室を研究室にしてくださり（今は「交流ラウンジ」になっている部屋で研究室としてはかなり広い）、そこにポツンと一人でいました。アパートに私物が届くのが2月25日頃になるということで、それまでこれも今

はない秋大のゲストハウス（名前忘れた）に一週間ほど泊まらせてもらいました。ずっと連泊することができないルールだったので1泊だけ駅前のアロハな名前のホテルにも宿泊しました（2月だけど、共用のシャワーだけでしたよ）。

当時、マイカーもなかったもので、仕事以外の時は駅前を徒歩でウロウロしていました。その際、市民市場のそばの金物屋さんの入り口に貼ってあったのが「熊よけの鈴 あります」の張り紙でした。自分は遠いところに来たんだなあと痛感したものです。それから20年近くたって、熊よけの鈴が市内の子どもたちに配られることになろうとは！

もちろん、「われわれ教職大学院にとっての2月」ということでいえば、あきたの教師力高度化フォーラムという超重要な行事がある月として認識されます。「なぜ2月は他の月より短いのか」の故事に基づくように、一年の締めくくりとして2月を位置づけ、次の研究課題を見いだせる月にしたいと思います。

秋田の冬

学校マネジメントコース

現職院生1年次 澤田 潤

秋田の冬は寒い。雪が降り、時には膝のあたりまで積もるときもある。朝のまだ暗いうちから雪かきに追われ、汗びっしょり。車を走らせると、道路はツルツル。運転に細心の注意を払わなければいけない。職場に到着するとすでに1日が終わったような気分になる日も少なくない。ちなみに、秋田県の1日の日照時間は47都道府県中47位。日本一日照時間が短い。たしかに空を見上げ

ると、ほとんど毎日どんよりしている。

冒頭から非常にネガティブなことを長々と述べてしまったが、そんな秋田の冬でも楽しいことはたくさんあった。

教職の仕事に就いた20代の頃は、私は秋田の冬を楽しんでいた。週に数回、17:00にはダッシュで退勤し、近くのスキー場に行ってお雪ボードに興じていた。まだ始めて間もない頃なので

とにかく楽しかった。今思うと、当時の自分は、ちゃんと仕事をしていたのか怪しい。

また、冬休みには同僚と1泊でスキー旅行にも行った。行き先は安比高原が多かったと思う。滑り終わると夜遅くまで盛り上がった。徹マンしてほとんど寝ないまま翌日元気にゲレンデを滑っていたときもあった。当時は体力も気力もあったなあと思う。そうした同僚との付き合いの中で、先輩とも仲良くなれたし、先輩からいろいろなことを学ぶことができた。時代なのか、先陣を切って企画する人がいなくなったからなのか、30代になると自然とそういうことが無くなっていった。

雪を楽しむのは子どもも同じである。学校での冬の大イベントはスキー教室だ。行っていない学校もあるが、スキー場が比較的近くにある学校は今も行っているのではないだろうか。一番心に残

っているのは、採用になった東成瀬小学校である。近くにジュネス栗駒スキー場があり、そこでスキー教室を行った。シーズンに3回は行っていたと思う。子どもたちにとってジュネスは庭のような場所なので、ほとんど全員が頂上から普通に滑ってくることができた。スキーのスポ少も盛んで、県の指定選手もいるほどだ。私が指導するために出る幕は皆無で、ただただ子どもたちの後ろを滑っているだけだった。また、ジュネスの中にはなぜか村の給食センターがある。だから昼食は給食だった。スキー教室なのに給食当番はエプロンやマスクをつけ、普通に給食当番の仕事をしているのが衝撃的だった。

若い頃のように体力を消耗するようなことは厳しいが、ポジティブに考えて秋田の冬を少しでも楽しみたいと思う。

「スキー」から考える

学校マネジメントコース

現職院生1年次 渋谷 純一

今回のテーマは「冬の思い出」。すぐに思い出すのは「スキー」です。しかし、秋田県で最も積雪が少ない街で育った自分にとって、スキーとの出会いは遅く、大学生の時でした。当時の養護学校の多くは冬にスキー教室を実施していて、初任者研修でもスキー研修が組まれていたという時代。友人に勧められるまま、用具を準備。自分の中ではすでに「滑れるモード」に入っていましたが、スキー場デビューは「夜のオーパス」。風が強く、コースはガリガリという状況、転び方だけは上手くなりました。転びながら聴いた広瀬香美「ロマンスの神様」やカズン「冬のファンタジー」を忘れることはありません。そんな厳しいデビューでしたが、その後研究室の仲間のサポートやレクチャーもあり、なんとかボーゲンができるようになりました。

そんなスキルのまま初めて勤務したのは秋田県

立ゆり養護学校（現：ゆり支援学校）。土曜日も隔週で授業があった時代でした。先輩にはスキー愛好家が多く、勤務後に矢島スキー場のナイターへ出かけることが度々あり、声をかけてもらっていました。スキーキャリアに板をセットして出勤し、勤務が終わるとすぐにスキー場へ。初心者の中には上級者の先輩方が丁寧に教えてくれ、スキーの楽しさを感じることができました。

このエピソードを思い出しながら、改めて「挑戦すること」や「見守り育て、楽しさを共有する環境」の重要性を感じました。もしガリガリのオーパスで挫けていたら、先輩のお誘いを断っていたら、スキーの楽しさや醍醐味を感じることはなかったでしょう。ゆり養護学校では7年間勤務し、教員としての基盤を築けたのは、自身のチャレンジを見守ってくれた温かい先輩方や管理職のおかげ。今年度、

再び秋田大学で学びの機会を得て、挑戦することの重要性を再確認しました。暁鐘の音の記事を担当することで当時の経験と現在の思いが繋がっ

たと感じがしました。これからも挑戦を前向きに受け入れながら、様々な世代や立場の方々と教職の楽しさや醍醐味を共有していきたいと思います。

フォーラムに向けての意気込み

カリキュラム・授業開発コース

学部卒院生2年次 福原 航平

この教職大学院に入学して早二年の月日が流れようとしています。入学式がつい昨日のことにように感じているのは皆さんも同じではないでしょうか。思い返してみると、この2年間先生方や院生室の方々に恵まれ、多くのことを学び、実践することができました。これらの集大成をお世話になった方々へ伝え、恩返しすることが、「あきたの教師力高度化フォーラム」の目的の一つだと思っています。ここでは、私が大学院での研究にかけている思いをお話ししたいと思います。

私は、全ての子どもたちが数学をわかった、できたと感じられるような授業を行いたいと常々思っています。自分で考えて問題を解決できることが、数学の楽しさの一つです。恥ずかしながら、私自身大学院にきてはじめて勉強が楽しいと思いました。その楽しさを伝えるためにも数学の教員として、子どもたちが楽しくて勉強したくなるような授業を行っていきたいです。ここでの研究はこのための第一歩だと思っています。私の研究領域でもある中学校数学科の図形領域は非常に難しく、多くの子どもたちが躓くポイントになっています。そんな課題に対し、何かできないかと思い、

本研究のテーマとしました。今年度は、公立学校にインターンシップにいき、「基本的な作図」の単元を実践させていただきました。拙いながらもなんとか研究を進めることができましたが、結果はうまくはいきませんでした。授業を行ったクラスの26名全員がわかった、できたと感じてはいなかったと思われます。しかし、数学をわかった、できたと思えるような授業の示唆を得ることはできました。こうして得た成果と課題を見つめ直し、いつか理想の授業にしていきたいと思います。今回のフォーラムでは、そんな思いを込めた研究成果や課題を発表したいと思います。研究について多くの方々と議論し合い、深められることを楽しみにしています。

教職大学院での1年間の学び

カリキュラム・授業開発コース

学部卒院生1年次 木元 拓斗

秋田大学の教職大学院に入学して1年が経ち、振り返るととても学びのあった濃い1年間であったと感じる。私は学部時代には仙台市にある他大学で臨床心理学を専攻し中学校の教師を目指しながら心理師の資格の取得を目指していた。学部時代には、病院の精神科や刑務所、

少年鑑別所での実習など貴重な経験をすることができた。また、仙台市児童相談所での勤務でも虐待を受けた幼児・児童の一時保護、非行・犯罪をした児童への支援などにおいての対応力を高めることができた。しかし、大学卒業後すぐに秋田県で社会科教師として現場に出ること

には不安があった。そのため、もっと社会科の授業力を高め、自信を持って学校現場で働けるような実践力を付けたいと思い、秋田大学の教職大学院に入学することを決意した。

実際に教職大学院では教育学部出身ではない私にとって、学部時代とは比べ物にならないほどのたくさんの出会いと学びがあった。教職大学院では日々の授業と週に一回の附属学校での実習を重ね、自分の授業の課題を分析したり、授業で新たな知見に触れることができたりと、一度現場に出てしまっただけでは中々できない「理論と実践の往還」ができると感じた。また、現職院生との協働的な学びも貴重な経験である。まだ現場に出たことのないストレートマスターにとって、現場で何十年と実践を積んでこられた現職院生の方々と協議することができたり、一

緒に授業を作ったりすることができた経験は教職大学院に来なければできなかった経験であったと振り返る。

また、個人的な話ではあるが、この教職大学院に入学してかつての高校時代の校長先生や昨年の実習先の母校の校長先生、現職院生として小学5年生の時の担任とも再会でき、直接学ぶことができていることもとても幸せなことであるとを感じる。ストマスの同期や先輩も含めてこうした縁を大切にして生きていきたいと考えた。入学してから早くも1年が経とうとしており、あと1年後には現場で働かなければならぬため、残り1年の大学院生活をさらに充実したものにし、自分自身が目指す「心理臨床の専門性を持った社会科教師」に近づけるように努めていきたいと考える。

結びに

この度は、暁鐘の音 33 号をご覧いただき、ありがとうございます。今回の 33 号では、来る教職大学院 10 年目に向けて、そして冬に関すること、フォーラムに向けて、他大学卒業生の教職大学院での学びといった、幅広いテーマで原稿を依頼させていただきました。先日、教職大学院の集大成である「あきたの教師力高度化フォーラム」が無事成功に終わり、別れと出会いの季節にさしかかっております。今年度は院生室の机もすべて埋まり、たくさんのメンバーで行事を行ってきました。これから 10 年目を迎えるということで、更なるパワーアップが期待されると思います。今後の教職大学院の益々のご発展をお祈り申し上げます。

暁鐘の音 33 号編集担当 安部大成

3 月の行事予定

2025 年

14 日 実践研究報告書最終提出締め切り
22 日 卒業式、卒業を祝う会

